



書
評



門脇厚司著 「親と子の社会力」

(朝日新聞社)

2003年12月25日発行

鈴木 和子 (東海大学健康科学部)

本誌7巻2号で、「子どもの学校生活から垣間見える家族」という特集を組み、5人の著者から貴重な論文をいただいた。そのお一人として、門脇厚司氏から、「子どもの変質と新しい親密圏づくりの必要性—子どもの社会力回復のために—」というユニークな論考をいただいている。その著者が、これまでの主張をまとめ、「親と子の社会力」という著書が出版された。その第3章には、本誌の論文が初出論文となり、加筆されたものが出されるということで、本学会編集委員会に転載許可の申し出があった。そのような事情から、出版前に本書が送られてきて、早速、目を通している内に、本書の親と子に社会力の付与の必要性を説く主張は、家族看護にとっても大きな示唆を与えるものであると考えるに至った。

本書の成り立ちとしては、第1章の親と子の変容と第2章の親と子の「リアリティ」の危機 では、最近の子どもの変質や少年犯罪などの現象がどのような理由から起きているのかが考察されている。第3章の岐路に立つ家族 では、核家族を代表とする近代家族から現代の家族の変容がいかに進んでいるかが証明されていて瞠目させられた。第4章では、「なぜ人を殺してはいけないか？」

にいかにかに答えるか というテーマで、加熱する「心の教育」ブームからの脱出を提案している。

最終章の第5章では、実効的な子育て空間「親密圏」の可能性 ということ、子どもの健全な成長を保障するためには、何らかのかたちの「親密圏」が不可欠であるという主張がなされている。その親密性を確保する場合、最初に考えられるのは、家族の再生ではあるが、それが近代家族への復帰であるとする、かなりの抵抗があるのは当然である。とすれば今、緊急にすべきことは、家族に替わる親密圏をつくりだし、その新しい親密圏の中での子育てをし、その中に親たちも取り込むことであるという。

本書では、日頃、私たちが感づいてはいるが、直視できないでいる子どもの変容や問題に対して、著者は、社会力を育てること、家族に替わる親密圏の必要性を説いていて、家族看護学の分野では、見過ごすことのできない主張である。これは、子どもの問題だけではなく、親も含め、すべての大人たちにも関連することであり、家族看護学の教育、実践に携わる学会員の皆様も是非、本書を手にとってみられることをお勧めしたい。